

所沢商工会議所青年部 海外視察研修会報告書

長沼 浩

日時

2008年7月3日～7月7日（5日間）

場所

ブルネイ・ダルサラーム国・マレーシア

趣旨

ここ数年、ASEANに焦点を当て、各国に進出した日本企業や現地国営企業などの視察を行ってきた。本年度もASEAN諸国に目を向け、ASEAN唯一の産油国であるブルネイの視察を考えている。原油価格が史上初めて1バレル＝100ドルを超え、エネルギー資源のほとんどを海外に頼らざるを得ない我が国は、非常に厳しい状況下にある。ブルネイは、我が国日本への輸出割合が3割を超え、経済連携協定の締結、主要閣僚の往来など、日本と緊密な関係にあり、今後、これまで以上に両国における貿易が盛んになることが予想される。また、現在でも天然ガスについては日本の三菱商事が出資しているブルネイLNG社が生産・販売に当たっている。このような現状を踏まえ、原油産出国であり、我が国にとって重要な国のひとつであるブルネイの視察研修会を開催する。

報告として

日本に帰国すると新たなキーワードが加わっていた。ファニーメイとフレディマックである。これは、サブプライムを始めとする住宅ローンを保障する公社である。国の関与が強い為に、米国債並みに信用力が高いとも言われているものだが、これが信用不安に晒されている。原因は、アメリカの住宅ローン制度の欠陥ともいえる物だが、ウォーカーウエイというローン形態である。これは、ローン残高に対して、家の価値が低くても、家を明け渡せば、その不足分を免除されるというものである。現在の様に、住宅価格が暴落している際には、サブプライムなどに損失が積み上がり、結果としてサブプライムを組み入れた債権などから、資金が逃げ出し、原油などの商品市場に流入している。その為、原油は実需から見た価格よりも40ドル程度上昇していると言われている。近年の一次産品の需要増加とあいまって川上に資金が移動している。これは、資源ナショナリズムと資源温存への方針転換に、過剰流動性が拍車を掛けているのである。

今回の視察先のブルネイは、正にこの川上に位置している。今回訪れてみての第一印象は、豊かな国の一言である。道路も、整備されており建物も綺麗にされている。治安も良く殺人事件は2年前との事である。また、厳格なイスラム教徒というのも一因であると思われる。税金、医療費、学費、年金などの公的負担は一切無い。一方で、国内に大きな病院は無く、その際には、シンガポールに移送するそうである。シンガポールには、国王の所有するホテルがあり、家族などは、このホテルを無料で利用出来るそうである。なんとも恵まれているのだが、一方で、国内の通信会社など大きな企業には、必ず王家の資本が50%入っており、自動的に収入が入る仕組みとなっている。ある意味、税金とも言えるかもしれない。日本でいえば、全ての上場企業の株の50%は、天皇家で所有しているようなものである。また、イスラム教徒は、賭け事が禁止されており、株の売買も禁止されている。つまり、証券市場は無く、設立した時の資本関係が永遠に固定される事となっている。王家の出資比率が変動する事は無いのである。強烈な支配力と云っていい。

一方で、文化度は、あまり高いとは言えない。水上生活者などもまだ多数いる。首都においても

30%程度が水上生活者である。この国の気候に合っているのかもしれないが、衛生的な環境とは言い
がたい。世界の富が、川上に集中している様に、この国の富も王家に集中している様に思われる。

日本との関係は良好だが、一般的には日本人がこの国を訪れる事は少ない。年間 4000 人程度で、
その中には、油田開発で合弁している三菱商事の社員も含まれていると思われる。しかし、貿易は年々
増えている。ブルネイでは、良質な原油と L P G が産出されているそうである。確かに、他地区と比
較して、透明度の高い原油が取れている様である。

さて、ブルネイに入国するに当たり、直行便は無く、マレーシアトランジットとなった。ブルネイ
は、周囲をマレーシアに取り囲まれた国でもある。そこで簡単にではあるが、マレーシアとの比較を
行ってみたい。

	人口（万人）	G D P（億米ドル）	一人当たり G D P	対日貿易率（%）
ブルネイ	38	115.5	30,394	31
マレーシア	2664	1343	5,901	8.9

やはり、人口というものは、国力につながる。マレーシアは、ブルネイの 70 倍の人口を抱えてい
るので、G D P 自体は大きくなっている。しかし、油田を抱えているブルネイでは、一人当たりの G
D P で、マレーシアを大きく離している。日本の場合、35,156 ドルであり、当然マレーシアなどを
大きく離してはいる。しかし、人口 38 万人のブルネイが日本に近い所にあるのである。油田のみと
いいいい国と日本の全産業の総力戦での対比であり、いかに産油国である事が、富の移転をもたら
しているかが伺える。

資源ナショナリズムという言葉をよく耳にするようになって久しいが、ブルネイを見る限り、油田
がなかったとしたら、国家として成立していたか疑わしい。あるいは、毒にも薬にもならない存在と
して、存在だけはしていたかもしれない。それが、一人当たり G D P では、日本に近いのである。必
死になって守ろう、長く持たせようとするのは至極当然とも言える。日本は、資源の無い国である。
食糧の自給率さえ 40%を切る有様である。この国は、もっと必死になって外貨を稼がなくては、飢
えてしまうのである。伊藤忠商事(株)会長の丹羽宇一朗さんの近著で「汗出せ、知恵出せ、もっと働け！」
というものがある。正にその通りである。「日本は、持たざる国である。」この事が身にしみて感じら
れた事が、今回の視察において最大の収穫であったと思う。

最後に、今回の視察を快く承諾して頂き、また事務局随行まで認めて頂きました、所沢商工会議所
の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

以上